

## 春を待つ

### 1. 土の中から聞こえる (地図中①地点)

4月も近づき、ぽかぽか陽気の日がくるようになると谷筋でグウグウとどこからともなく鳴き声がします。春の到来を告げる声です。近づくとも声が途絶え、姿も気配もまったくわかりません。この正体はタゴガエルで、広く分布するカエルですが、姿を見つけにくいことから新種として認められたのは1928年です。打吹山では3~4月に産卵します。水が滲み



タゴガエルの卵

出る場所や谷筋の横の石の下に雄が凹み

を掘り、鳴いて雌を呼びます。石の下や土中であるため見つけにくいのですが、数十の大きな卵を産みます。閉鎖された餌のない環境なので、たくさん栄養を蓄えた少数の卵を産む繁殖戦略です。相撲場上の遊歩道脇のように、運良く奥の浅い凹みの場合は卵をみることができます。ただし、土を崩して見るようなことは止めてください。



タゴガエル

成体は春から夏、林下で出会う場合があります。アカガエルに似ていますが、アゴの下が黒いことが特徴です。

### 2. 大切な成長点の保護 (地図中②地点)

植物は死細胞からできている部分が多いのですが、生細胞からなる成長点は伸長するために重要です。この成長点を冬期の低温から守るために、球根のように地下に置くなど、いろいろな手段をとっています。その一つが冬芽です。鱗片葉で包み、若い



コナラ冬芽

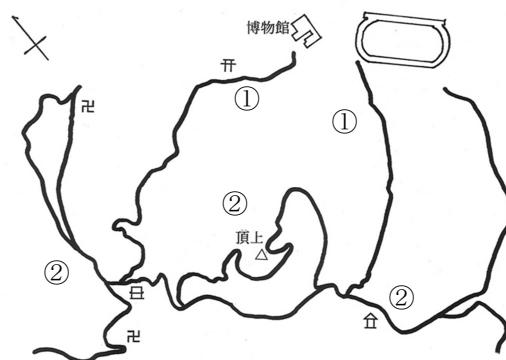


コナラ冬芽の断面

葉や花、芽を低温や乾燥から防いでいます。この対策がしっかりできている植物はより寒冷地に生育することができます。光合成をする葉ではなく、コルク化したり毛をはやしたり防寒用に特化した葉です。左の

コナラ冬芽では鱗状に覆っています。断面でみると、5枚で一周を包むため五角形になっています。1芽の鱗片をはがしてみると37枚ありました。ハクモクレンでは、3枚の葉が3重に覆っていますが、毛の生えた葉柄(ようへい)部分が広がり、反対側でぴったり合わさっています。葉身部分は退化し、痕跡となって残っています。

種によって枚数、包み方もいろいろです。調べてみましょう。



ハクモクレンの花芽と葉芽